

善した。

腸球菌はヒトの腸管や女性外陰部の常在菌であるが胆道系感染の起原因菌としてその頻度は高く、グラム陽性菌全体の中では70%弱を占めている。腸球菌はセフェム系抗生剤は自然耐性であり、また最近ではペニシリン、テトラサイクリン系抗生剤に耐性化が進んできている。さらに1980年代後半より欧米ではバンコマイシン耐性腸球菌が出現し、現在では院内感染の重要な起原因菌となりつつある。今後、日本でも院内感染の起原因菌として問題になってくることが予想される。

高齢化社会となり、心疾患や糖尿病などを併発症として有する胆道系感染症が増加しつつある。急性胆道系感染症の診療においては起原因菌の決定のため迅速胆汁グラム染色をルーチンに行い適切な化学療法を施行することが今後ますます重要になってくると思われる。

8) 慢性涙囊炎の Fosfomycin 涙囊内注入によるサイトカインに及ぼす影響

大石 正夫(白根健生病院眼科)

目的:慢性涙囊炎は鼻涙管に障害を有する細菌感染症で、保存的治療(涙囊洗浄,点眼)により、時に慢性の急性増悪をくり返す難治性の症例を経験する。Fosfomycin (FOM)には本来の抗菌作用の他に、種々の生物学的活性を有することが報告されている。今回FOMの抗炎症作用を期待して、難治性慢性涙囊炎にFOM液を投与して、in vivoにおけるサイトカイン産生に及ぼす影響について検討した。

方法:3%耳科用FOM液1mlを涙囊内に注入、週3回2週間投与した。FOM投与前、後に涙囊洗浄液を採取して、ELISAを用いて各種サイトカイン濃度を測定した。

結果:IL-8は全ての検体で検出され、増減がみられた。IL-4は検出されなかった。IL-1 β では増加がみとめられた。

今回の結果のみでは、FOMとサイトカイン量との間に何らかの関連を見出すことは困難であった。今後症例を加えて検討する予定である。

9) TBA-80FRを用いての血清アミロイドA(SAA)の検討

井上 智美・早川 宏美(水原郷病院)
柄沢 安雄(検査科)
鈴木 康稔・関根 理(同内科)

血清アミロイドA(SAA)は急性期蛋白の一種で炎症の活動度や、治療効果のモニターに有用とされている。今回我々はSAAについて若干の知見を得たので報告する。

【方法】ラテックス凝集反応試薬「LZテスト'栄研'SAA」を用い東芝80FRにてSAAとCRPを測定した。

【結果】心筋梗塞例ではCRPよりSAAの方が発症後速やかに陽性を示し、ステロイド剤を投与している症例ではSAAのみ変動が見られCRPは陰性を推移していった。尿路感染症の症例ではCRP、SAAは同様な変動を示しながら推移したが、大腸菌消失時にはSAAは陰性に等しい値まで低下していった。

【考察】心筋梗塞例、尿路感染症の症例ではSAAの方がCRPよりも病態の推移をより速くダイレクトにとらえることができた。ステロイド剤を投与している症例ではSAAはステロイド剤の影響を受けないことが示唆されCRPより有効なマーカーとなった。

10) 小児急性中耳炎症例における細菌学的検討

富山 道夫(とみやま医院耳鼻咽喉科)
(気管食道科)

小児急性中耳炎の主な起炎菌である*S. pneumoniae*、*H. influenzae*のnew oral cephem(CPDX-PR, CFTM-PI, CFDN, CDTR-PI)に対する薬剤感受性を検討した。その結果CDTR-PIは最も強い抗菌力を示し、CmaxをMIC₉₀値で除した値(Cmax/MIC₉₀)を指標とした検討においても、CDTR-PIは両菌ともに比較した薬剤の中で1位となった。CDTR-PIは小児急性中耳炎に対して今回検討したnew oral cephemの中で最も臨床効果を望める薬剤であると考えられた。またCDTR-PIを用いた小児急性中耳炎症例を提示し、治療上の注意点、問題点について述べた。